Destroy World

farjoker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｓｔｒｏｙ　Ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ０５３１Ｈ

【作者名】
ｆａｒｊｏｋｅｒ

【あらすじ】
戦いに明け暮れる二つに割れた世界を繋ごうとする『Ｃｈａｎｇｅ Ｗｏｒｌｄ』。戦いを終わらせるため三人のライダー「ランセル」「０６」「ディス」が今立ち上がる。バトル満載のライダーアクションです。結構シリアスです。

プロローグ：壊れる世界

少しばかり遠い未来。世界は二つに別れていた。
人間（NEXT）の限界を超えた力を持つ新人類。
科学（仮面ライダー）による力を手に入れた人類。

新人類は異形の姿を持つようになり迫害される。迫害された新人類は人類に復讐を始める。どちらも自分とは違うモノを恐れやられればやり返す。いかにも人間らしいことを繰り返し互いを同一の存在だと見ることはやめた。同じモノだったはずの彼らはやがて全面戦争へと突入する。戦いはどちらかが滅びるまで・・・。

これは分かり合おうとする数少ないグループと戦場を駆ける三人の仮面ライダーによる闘いの記録である。

『滅びの未来をその手で変えろ！！』

プロローグ：壊れる世界（後書き）

まだ別の書いているのが軌道に乗っていないのに何やっているんだか・・・

後あんまり戦争ダメとかは語らないようにしてバトルと心情を中心にやっていきます。

第一話：仮面ライダー（前書き）

今回は一話ということでやや説明的な文が目立ちます。

第一話：仮面ライダー

廃墟の中一人の男が走っていた。彼の体から流れ出ている血は青い。彼を追う者達は非武装の男相手にはやり過ぎであろう装甲を纏っていた。ただそれは彼が人間ならの話だ。彼は『ＮＥＸＴ』。彼らが『次なる人類』としてつけた名。そして『次なる進化への土台』と人類が言う名でもある。

追われている男の名は誠也（せいや）。苗字が無いのはＮＥＸＴの姿は原型が代々受け継げられていくためである。

「お前らが滅びれば解決なんだよ。この化け物が」

ライダー部隊の隊長らしい男が言い放つ。誠也はロクにうごかなくなっているからだをうごかそうとする。そこに唐突に銃弾を撒き散らしながら大型車両が突っ込んでくる。誠也はあっという間に連れ込まれるとすぐに姿を消した。

―トレーラー内

「大丈夫か？」

自分と同年齢だと思われる青年が話し掛けてきた。やや多めのネックレス達を揺らして横に腰掛ける。

「君達は誰だ？なんで俺を助けた」

誠也は質問に答えず不信感を隠さず質問を返す。

「何でって知らない？このトレーラーで気付いたと思ったんだけどな～」

目の前の男はそういうがそんなの見ている隙（ヒマ）もなかった。

「新貴（しんき）、アンタのくだらない謎掛けに時間は費やせないの。代わりに私が説明するわよ」

はいはい。と生返事をし新貴と呼ばれた男は肩をすくめる。先程自分を助け出した奴だとは思えない態度だ。

「私たちは『Ｃｈａｎｇｅ　Ｗｏｒｌｄ』。戦争をやめさせようと

するのが活動。ちなみに私は相崎風香（あいさきふうか）。元仮面ライダーの開発主任。でそいつが姫矢　新貴。人間よ」
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｗｏｒｌｄ』。聞いたことはある。人間、ＮＥＸＴ問わず戦いを終わらすため戦争に介入したりしている組織だ。戦争には戦争をぶつけるという目的で動いている。ならば誠也を助けたのも納得がいく。
「ものは相談だけどさ、俺達に協力してくれない？」
新貴が問い掛ける。
「戦争は終わらしたいとは思う。けど君達の目的が分からない。どうみても戦いを掻き回しているようにしか見えないし」
「ああ、わかっているじゃないか。俺達の目的はそれだよ。戦争を混乱させる。そうして俺達が驚異になれば人間もＮＥＸＴも手を組まざるを得なくなる。そうすれば奴らは自分達は根本的なところでは同じ存在だと気づくだろ。だから俺達は人間もＮＥＸＴも倒さなくちゃいけないからな」
新貴は軽い口調でしかし目は真剣に語った。誠也は答えない。
「まぁ、やりたくなけりゃやらなくていいさ。別にそれだけが仕事じゃないし」
誠也はゆっくりと口を開け―

爆音が聞こえた。
「さっきの！？」
「違う！ＮＥＸＴだ！！」
新貴は叫ぶなりベルトを掴むと外に飛び出した。素早く腰につけ正面のカバーを横にずらす。
『０６ＳＹＳＴＥＭ・ＯＰＥＮ』
「変身！！」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
二つの音が響き新貴を銀と青の鎧が包む。
「人間などが我々に刃向かうなど！！」

そういって大量のＮＥＸＴが現れる。
「スピード重視か、確かにコイツは鈍いが敵じゃないぜ」
素早く動くＮＥＸＴを的確な射撃で次々と撃ち抜いていく。人間どころか訓練されていない一般人のＮＥＸＴでは全く見ることが出来ない速さにもついていってる。
「すごいでしょ、彼」
指示を済ましたのか風香が話してかける。
「ええ、何か他のライダーとは違うようにも見えるし」
「その通り。０５システムっていうのが今使われているライダーシステムだけどあれはその延長で私が造った０６。でもね相手を倒せているのはそれだけじゃないの。システムはあくまで対応できるようにしているだけ。アイツは生身でもＮＥＸＴと戦えるからね。動態視力ならＮＥＸＴを越えるわ」
確かに圧倒的な速度で動くＮＥＸＴに一歩も動くことなく射撃のみで対応している。相当な実力だ。
「どうした？その程度か？さっきの威勢はどこ行った？」
敢えて一つ一つ区切るようにいい相手を挑発する。
「貴様・・・調子に乗るな！」
五体の敵が突っ込んでくる。素早く二体を撃ち倒すと警告する。
「そこ、固まると危ないぜ」
彼は無反動砲を担ぎ撃ち込んだ。直撃しさらに爆風でもう一人を倒すことに成功する。
「後、鈍いけど接近戦が出来ないとは言ってないからな」
残りの一体にハンドガンを叩き付け更に攻撃に移ろうとするが手を止めてしまう。
「しまった！！」
振り向いた彼の視線の先にはトレーラーとそれに迫るＮＥＸＴがいた。

ガンという鈍い音が鳴りトレーラーがよろける。そのままＮＥＸＴが侵入してきた。
「人間・・・死ね！」
飛び掛かってきたタイガーネクストに誠也は慌て応戦する。身体が黒い色が走る狼、ウルフネクストへと変化した。
「我々と同種族か・・・だがその傷では戦えまい」
タイガーネクストの言う通りＮＥＸＴは身体に大きな傷を負うと姿を維持できなくなる。当然長く休めていない誠也は振り払われただけで人間の姿に戻ってしまった。
「今なら見逃してやる。そこを退け。その女を殺す」
無論、誠也はどくつもりはない。周りを見回し武器になりそうな物を探す。目に入ったのはライダーベルトだ。
（確かライダーシステムは衝撃が加わらない限り変身は解けないはず・・・なら行けるかもしれない！！）
誠也は横に跳ぶとベルトを掴み腰につける。
「ダメっ！そのベルトは！！」
だが彼はその声を聞くことなく新貴がやっていたのを思い出しカバーを開く。
『０７ＳＹＳＴＥＭ・ＯＰＥＮ
生態データＮＸ０６５３を固定
識別データに認識
パスワードロック解除
全情報をマザーに送信
システムオールグリーン
ＨＥＮＳＨＩＮ　　『機械音の終了と共に彼を黒が包み赤いラインが各部に入る。
（コイツは他のライダーシステムとは違うのか・・・？）
彼が知っているライダーシステムとはあくまで装甲。しかし０７というらしいこれはスーツといったほうが近い印象を与える。
（よく分からないな・・・。でも今はアイツを倒すのが先だ）

彼はベルトのアタッチメントにつく武器を見る。両刃の剣とハンドガンだ。その中から剣を外す。
『ＡＴＴＡＣＫ　ＢＬＡＤＥ』
効果音が鳴り剣の刃が延長される。相手も剣を取り出すと打ちかかってくる。誠也はそれを正面から防ぎ片手でハンドガンを掴む。
『ＡＴＴＡＣＫ　ＧＵＮ』
無数の光弾が至近距離から発せられる。
「ぐあぁぁ！！」
吹き飛ぶタイガーネクスト。誠也は武器を腰に戻すとベルトの横のレバーを押す。
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
チャージされたエネルギーが右足に集中する。
「ハァ！！」
高く跳び上がり必殺の蹴りがタイガーネクストに直撃する。激しい爆発が起こり深紅の焔の中から誠也は立ち上がった。が、
「動くなよ！テメェ！！」
０６が手に持ったアサルトライフルを放ってきた・・・

第一話：仮面ライダー（後書き）

ちなみに作者の年齢的に平成ライダーのオマージュ（パクリ）が入ります。（誠也のウルフネクスト→たっくんのオルフェノク状態）イメージとしては０６はゾルダ＋Ｇ３－Ｘですね。主役はまだ考え中です。

次回予告（ＴＶ風に）

「０７は戦いつづける・・・」

「死ね！化け物！」

「お前はどうしたい？」

「俺は仮面ライダーランセルだ！！」

「満たされねぇな・・・」

『滅びの未来をその手で変えろ！！』

第二話：戦う理由（わけ）

「何するんだ！！」
銃弾を避け叫ぶ誠也。その声を聞くとあっさりとやめ一言。
「あれ？意識あんの？」
ガチャリとアサルトライフルを肩に置きながら拍子抜けするように言った。
「当たり前だろ！」
「・・・あ～、悪かった悪かった。ちょっと待て。こっちも整理中だ」
何やら困った様子で変身を解く。誠也も変身を解くと風香が駆け寄ってきた。
「風香。これってもしかしたら」
「ええ、適合者かも」
さっぱり訳の分からない会話が繰り広げられている。
「う～ん。とりあえず説明するわ」
「まぁ、説明しないと謝れねぇしな」
二人は誠也に向き直り口を開く。
「その０７は人間・・・いいえＮＥＸＴですら使うことが不可能なの。０７はより戦えるように出力とかを大幅に変更した。今までの装備者はその際に付けた自立プログラム『ｔｒａｎｓｃｅｎｄｅｎｔａｌ　ｓｙｓｔｅｍ』が判断した決定に逆らえないで戦いつづけたんだけど・・・」
「だから俺が毎回気絶させてベルト外してたんだが・・・さっき攻撃したのはそれが理由だ。悪かったな」
「大丈夫だ。それより俺が戦っていたときはそんな物気がつかなかったんだが」
「システムは深層心理に作用するの。あなたはそれを無意識で制御したんじゃないかしら。今までこんなことなかったから分からない

けど・・・」
「まあ装着できる奴がいたのはいいことだろ」
飄々と言いながら更に言葉を紡ぐ。
「ただあんたが戦いたいかどうかだ」
「いや俺も戦うよ」
「あんたはまだ分かってない。いまなら戻れるんだ。別に俺らは協力しろって言ってる訳じゃない。助けてやった礼ならさっき返してもらったしな」
新貴は真面目な表情で言った。ふと爆音と共に車体が揺らぐ。
「おいおい、今日は厄日か？」
再びベルトに手を伸ばしながら新貴はつぶやく。
「俺も行く」
「だ～か～らな、今来ているのはライダーだ。大体察するにお前一回あいつら側で戦ったことあるだろ？じゃなきゃあいつらに追われてた説明がつかない」
「ああ、確かに俺は一時期ＮＥＸＴからライダー側に移ったことがある。だから何だ？」
「今なら戻ってもあまり咎められない。ついでにＮＥＸＴの部隊を壊滅させたことで評価も上がるだろう」
「ちょっと、新貴！？」
「それに変えこっちは矛盾している理想を掲げて実現するかどうかも分からないようなことをやろうとしている。どっちを選ぶかはお前次第だ」
新貴はそこで言葉を区切る。その時に誠也は聞いた。
「じゃあ君は何で戦っているんだ？」
ここまで発言する新貴が抱く戦う理由は何なのか、そう思ったことをストレートに聞く。
「・・・・・俺はな、死んだ女の面影を追ってるだけだ。参考にはならねぇ」
吐き捨てるような言い方をしそれで終わりというようにベルトを腰

に付ける。
『０６ＳＹＳＴＥＭ・ＯＰＥＮ』
「変身」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』
姿を変え振り向き
「お前はどうしたい？」
最後に言い放ちバイクに跨がるとトレーラーから出ていった。

「数が多いな・・・どうやら偶然見つかっちまったみたいだな。ホントツイてねぇ」
そう呟く０６が乗るバイクは通称『走る火薬庫』正式名『ウォーリア』。人間側に通常配備されているバイクを０６用に改良したものである。通称通りバイクとしての面影がない程の武装を積んでいる。０６は次々と武装を解放していく。一人対五十人以上という差にも関わらず有利に戦いを進める。だが爽快にも思えるその行為は一方的な虐殺だ。しかし０６いや、新貴はそれに気付きながらも手を緩めない。彼が人の心を捨てた訳ではない。
「誠也とかいったよな・・・これが俺達のやることだ・・・お前は罪を背負えるか？」
新貴の呟きは爆音で掻き消された。

誠也は黙ってみていた。確かに自分の考えはあまかったかも知れない。自分のように一度戦場に出れば戦いが終わるまで逃げることはできない。
「新貴はね・・・」
風香が口を開いた。誠也はゆっくりと振り向く。
「昔は私達と同じライダーシステム開発チームだったのよ。私達は自分で言うのも何だけど優秀なチームだった。でもね出る杭は打たれるのよ」

「上からの圧力か？」
誠也は聞くが風香は横に首を振る。
「私達のことを疎ましく思った別の開発チームが軍のトップを買収して警備を外したのよ。当然ＮＥＸＴが攻めてきたわ。生き残ったのは私と新貴二人だけ。まあ、そのおかげで新貴にセンスがあることが分かったんだけど」
風香は皮肉のように言い切った。
「きっとアイツはもう失いたくないのよ。少しでも自分に関係した人をね」
「・・・・・・」
誠也は悩んでいた。自分がＮＥＸＴ側にも人間側にもいて戦ったのは戦いが意味の無いものだったから。彼等は皆新貴のように何かを守ろうとして戦っていた。みんな根本的なところでは変わらない存在なのだ。それを気付いているのに伝えていなかった。
「気付いたなら、伝えなくちゃならないんだ」
彼はベルトを手にすると走り出していった。

『ＲＩＤＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』
手にした小型銃から光弾が発せられ敵を薙ぎ払った。
「アイツは脱走したＮＥＸＴ！？」
その声がした方を振り向くと誠也が走ってきた。
「来たか・・・」
新貴は嬉しそうな悲しそうな声で呟いた。
「死ね！化け物！」
剣を振りかぶった０５が近づく。
「俺達は化け物じゃない！人間もＮＥＸＴも皆同じなんだ！！」
誠也は叫ぶ。
『０７ＳＹＳＴＥＭ・ＯＰＥＮ』
「変身！！」

『ＨＥＮＳＨＩＮ』
直後黒と赤の閃光が走り０５を逆に切り裂いた。爆発する次の瞬間には別の場所に跳び次々と切り裂いていく。あっという間に０６と並走する。
「戦うんだな」
「君が関わったものを守るために戦うなら俺は憎み続ける世界を壊すために戦うって決めたんですよ」
「そうか・・・だったら行くぞ！」
０６は後方からの支援。０７は速度を活かした技で次々と相手を倒していく。
「一個小隊俺についてこい！」
隊長らしい人物がこちらに向かってきた。
「貴様らライダーの力を手にしながら敵になるとは・・・何者だ！？」
「俺は仮面ライダーランセルだ！！」
誠也はふと思った名を言い放ち
「俺は『Ｃｈａｎｇｅ　Ｗｏｒｌｄ』の仮面ライダーだ！！」
新貴はいつも名乗っていた名を叫ぶ。
「一気にいくぞ！」
「分かった！」
二人がは横のレバーを押す。
『ＲＩＤＥＲ　ＳＨＯＯＴＩＮＧ』
『ＲＩＤＥＲ　ＳＬＡＳＨ』
光弾が二人を撃ち抜き、剣が一人を切り裂く。
『ＲＩＤＥＲ　ＫＩＣＫ』
続けて発せられた音声と共にランセルは高く飛び上がる。０６は銃弾を撃ち足止めする。
「はぁぁっ！！」
ランセルの蹴りが０５へと直撃し激しい爆風を巻き起こした。

「それでランセルって何だよ？」
「いや、何となく思い付いただけだって」
彼等のトレーラーは二度の襲撃があったものの致命的な被害はなかったのでとりあえず新しく加わった仲間誠也を紹介するために本拠地へ移動してた。
「ところで何で俺が戦う理由知ってたのさ」
新貴が疑問をぶつけた。
「ああ、風香さんが教えてくれたんだよ」
「・・・俺アイツにそんなこと話したことないぜ」
「何年の付き合いだと思ってるのよ。守るために戦う人？」
「恥ずかしいだろうがー！俺そんなキャラじゃないだろー！！」
「うわぁ！？新貴落ち着けって！！」
「ちょっ、コーヒーこぼしたじゃない！！」
「それよりも転倒するって！！」
誠也は揺れるトレーラーの中軽く命の危機を感じていた。

「ぐわあぁぁあぁ！！」
叫ぶその体からは血に染まった死神の持つような鎌が突き抜けていた。ゆっくりと倒れた０５の背後には各部に龍の意匠が見られる怪人が悠然と立っている。彼の周りにはＮＥＸＴ、人間問わず彼等が所持する武器では付けることが出来ないであろうえぐるられたような傷が深く付いている。龍の身体を持つ怪人は人間の姿になり自分が行った行為を見渡した。
「満たされねぇな・・・」
彼はその場を去って行った。

第二話：戦う理由（わけ）（後書き）

赤点、追試のオンパレードですよ。進学校ってレベル高すぎだってホント。ちなみにランセルはｔｒａｎｓｃｅｎｄｅｎｔａｌから来ています。次回は三人目のライダーの登場です。バトルシーン多めの展開はコイツが出てからですね。このライダー達はシナリオはなぞりませんがアギトの三人みたいなポジションになります。

次回予告（トマトさんのパクリとも言う）

「かかってこいよ！！」

「君の名はドラゴンネクスト・仁」

「ありがとうございます」

「変身！！」

『滅びの未来をその手で変えろ！！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0531h/

Destroy World

2010年10月13日18時08分発行